

## 「叫び」

出エジ 3：1-12

### ～あなたはどこへ向けていますか？～

今回の主題は「叫び」ですが、あなたが叫びたくなるときはどんなときですか。思わず顔を隠したくなるほど恥ずかしい思いをしたときですか、それとも喧嘩をしているときですか。

叫ぶとは口から声を絞って出すこと、つまり私たちの心のうちにあるものを出そうとする行為です。聖書ではカインがアベルを殺し、アベルの血によって地が神様に叫んでいる（創 4：10）というところで初めて叫ぶという言葉が使われ、それ以降たくさん箇所この言葉が使われています。

ところで、あなたはムンクの「叫び」という絵を知っていますか。この絵は一見、人が叫んでいるように見えますが、実は人が大地や人々の叫びを聞いて耳を閉ざしている絵なのです。あなたも今、この絵の大地や人々のように嘆きや悲しみなどで叫び声をあげていませんか。もしそうなら、その思いをどこへ向けて叫んでいますか。その叫びを処理する方法を知っていますか。今日はその対処を聖書からみていきましょう。

出エジプト記 3：1-12 より。モーセが生まれる頃、エジプトでは神様の祝福によりイスラエルの民が増え広がっていました。そのことを恐れたエジプトの王は、イスラエルの民に苦役を課し、生まれた男の子を殺すように命じました。イスラエルの民の子として生まれたモーセも当然殺される運命にありました。しかし彼はエジプトの王様（パロ）の娘に拾われ、王女の息子として育てられることとなります。こうして大人になったモーセですが、ある日イスラエルの民を苦しめていたエジプト人を殺してしまいます。そこから一転、王子であったモーセはパロから逃れる人生を送ることとなってしまいます。彼にとってこのことは人生のどん底、苦しみであったに違いありません。またモーセが荒野に逃げていたときもイスラエルの民はずっと苦役のなかにあり、神様に向かって日々叫び声をあげていました。こうして何年も経ったある日、神様はモーセにホレブの山で焼け尽きない柴を見せ、呼びかけます。その声を聞きモーセは恐れ、顔を隠しますが、神様はそこでイスラエルの民の叫びを聞き届けたこと、神様がモーセとともにいること、また燃え尽きない柴はどんな困難な状況にあってもあなたは決して燃え尽きないことしるしであるということを示されました。このことを通してモーセは神に仕える者として、イスラエルの民をエジプトから導き出すという使命を果たすこととなります。

では、例えばあなたがイスラエルの民のように苦しみの中にいるとして、あなたはそれに耐えること、我慢することはできるでしょうか？ 私たち日本人の多くは耐えることが苦手です。でもイスラエルの人々はそうではありません。どうして耐えることが苦痛ではないのでしょうか。それは耐えたその先に必ずいいことがある、ということを知っているからです。ダビデもその一人でした。

詩編にはダビデが神様に向かって叫び祈る姿がたくさんみられます。詩 18：6-9 で彼は心に光を求め、心の暗闇を叫びとしました。彼は天を押し曲げて降りてこられる方（まだ見ぬキリストの姿）を待ち望む思いを歌に込めました。また詩 119：65-67, 71 で彼は神様に、苦しみに会うことは私にとってしあわせだと語っています。それはダビデ自身が、人は痛みや苦しみの中にあるときに初めて本当の自分に気づき本物の神様に会うことができること、そしてその本物との出会いを通して人は成長し強くなることを伝えているのです。

あなたはでしょうか。困難の中にあるとき、神様を呼び求め、祈り叫んでいますか。問題が起きたとき対処を間違えて、心に溜め込んでしまったり、周りに当たってしまったりしていませんか。叫びを向ける場所を間違えてはいけません。叫びは神様に向けましょう。「主よ、辛いです」、「助けてください」と自分の心のうちを素直に神様の前にあらわしましょう。そして祈りとは神様との会話です。一方的に伝えるだけでなく、神様と会話をしましょう。祈りを聞いてくださった神様はあなたに答えてくださいます。あなたの重荷を取り除いて心に喜びと平安を与えてくださいます。それだけでなく私たちは耐えた分だけ成長し、神様の栄光をみることができるのです。

また、ダビデは詩 126：4-6 で種まきをすれば必ず収穫があることを歌っています。あなたが葛藤し戦うこと、耐えること。これがあなたの種まきです。そしてこのことを通してあなたは神様に愛されていること、イエス様があなたの葛藤、痛みや重荷を取り除くために来られたことを知るでしょう。

イエス様は苦しみに合うとき、いつも神様の前に全てをさらけ出して祈りました。唯一彼が神様に救いを求めて祈らなかったのは、十字架にかかるときだけでした。なぜなら彼は人からも神様からも見放されなければならなかったからです。この時だけは一人で耐えて、私たちの罪、重荷をたった一人で背負ったのです。それならば私たちは自身の抱えている重荷、痛み、葛藤をすべてイエス様に委ねなければいけません。そして、ダビデが苦しみの中で叫びを相手に向けず神様に向けたように、私たちもイライラや思い悩みを人にぶつけるのではなく、叫びとして神様に向けていかなくてはなりません。そうすれば神様はその心に平安を与えてくださるのです。

これからはあなたの重荷はすべて教会に置いて帰りましょう。そうすると軽くなったあなたは、周りの人々が歩けるように負うべき重荷を負ってあげることができるようになります。そしてまた、その重荷を神様の前に置くのです。そうすればあなたも周りも変わります。あなたが心のうちを素直に神様に祈るなら、神様は必ず答えをくださいます。向ける場所を間違え、人を傷つけることがないように、また自分自身を傷つけることがないように、心にあるまを神様に叫びましょう。

・・・もうすぐクリスマスです。あなたはクリスマスに飾るツリーは十字架を意味していることを知っていますか。またそのツリーの飾りは私たちの罪であることを知っていますか。ツリーの頂点にある星はイエス・キリストの光、ダビデの星です。この光に照らされるとどんなに汚い私たちの罪も全て美しく輝く宝石のようになるのです。ですから光に照らされるため、まず自分自身の中にある闇を知りましょう。そしてあなたとともにおられ、叫びを聞いてくださる神様に重荷を全て委ねていきましょう。（要約者：金光 瞳）